

生き方としての 根源的網羅思考と矛盾

高原 利生

takahara-t@m.ieice.org 2017.09.13
http://www.geocities.jp/takahara_t_ieice/

目次

1. はじめに
2. 知的生命の論理
 - 2.1 矛盾
 - 2.2 根源的網羅思考 (1)
3. 根源的網羅思考の原理 (2)
4. 生き方としての根源的網羅思考と矛盾 (3)
5. 結論と課題

1. はじめに 三通りの人の「生きる」

- 1) 既存のものを変えないで行動: 運用する
- 2) 既存のものを換え行動: 作る, 運用する
- 3) ゼロベースで換え行動: 作る, 運用する → 生きる要素の網羅

→ (**世界観, 価値観を持つ, 潜在意識, 態度、論理、行動**)の全部 (ゼロベースと言っても、本稿は歴史から学んだ共同観念を前提にしている、ゼロベースにはなっていない)

生きること = (世界観, 価値観, 潜在意識 → 態度) → 論理, 行動の繰り返し

生き方 = 「(世界観, 価値観, 潜在意識, 態度) ↔ (論理(方法))」

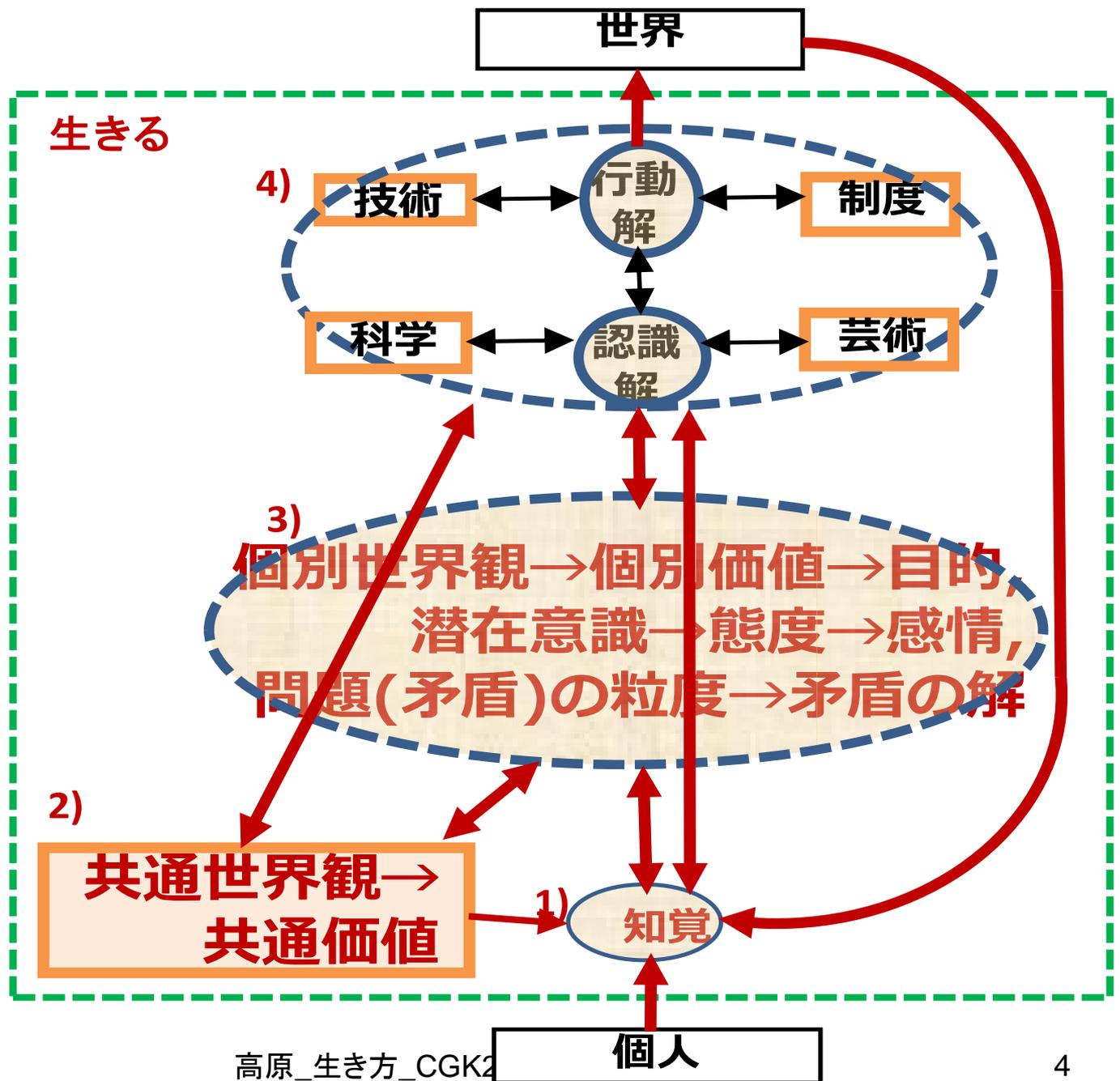
→ 論理が世界観、価値観、潜在意識、態度も規定するという意味で
本稿の題になった

1. はじめに

生きるモデル

(FIT2016を変更)

文化: 技術、制度、
科学、芸術



1. はじめに

・論理: 矛盾と根源的網羅思考

論理: 「関係」と「粒度(関連する対象の「大きさ」)の意識的管理」
の二つの扱い

「関係」が矛盾であらわされ、矛盾の「粒度の意識的
管理」を行うのが根源的網羅思考

- 本稿: 1) **この論理の説明** : 2.
2) **展開** : 3. - 4.(22)
3) **これが世界観を作る例** : 4.(23) -

この全部が「生き方」になる

2. 知的生命の論理

2.1 矛盾(概要:定義)^{[FIT2006,13,16,17] [TS2006, 10,11,12] [THPJ2012, 15/1,2]}

世界で物事はすべて相互に関連しているから、独立した物事は自身で進んでいかない。

→「相互関係を有した何か」を表す概念が必要

「相互関係を有した何か」の最少のもの; **項1ー関係ー項2**
が**矛盾**。これは単に運動(≡関係)の構造 **関係≡運動**

項1と項2の差異と**エネルギー**が矛盾という運動を始める。

前提:**いかなる空間時間でも使えるエネルギー**^[CGK2016]

差異によって起こる運動:物理的運動や思考など

2.1 矛盾 (概要:分類)

矛盾は世界の最小近似単位。

矛盾	説明
差異解消矛盾 (一次的な) 両立矛盾	通常の変化、変更例: プレート運動,地震 通常の矛盾。二項を(一時的に)両立 例: エンジンの大出力と軽量:機能と構造
(特別な永続する) 両立矛盾: 一体型 矛盾 [TS2010,11][FIT2016,17]	二項がお互いを変更し続ける両立矛盾 例: 機能と構造, 内容と形式, 一体化と対象化, 愛と自由

注意: エンジンの大出力と軽量の矛盾の例の場合、「項1—関係—項2」は

- ・「あるべき大出力 と軽量」が項1、今のそれが項2
- ・「望ましい重さ(軽さ)」が項1、「今の重さ(軽さ)」が項2
- ・「大出力(機能の属性)」が項1、「軽量(構造の属性)」が項2

という三種の言い方がある

2.1 矛盾 (一体型矛盾) [TS2010,11,12] [FIT2013,16,17]

生命と人類の長い歴史の中で、もともと一つだったものが、次のように分かれていく。二つの客観オブジェクトに; *例:雄と雌。労働と消費。機能と構造。*客観オブジェクトと思考に、二つの思考に、二つの態度に。そして、分かれたそれぞれは独自の発展を始める

ある時から、その二つは再統合の運動を始める。統合の条件は、1) 各項が、他項を、自らの発展の条件とするか、2) 自項と他項がお互いに他項の情報を自項の情報のサブ要素として取り込む、**入れ子**になること *例:フィードバック(入力→出力→入力→)、遺伝における機能→構造→機能→*

これで矛盾の各項がお互いを変化させることができるようになる。**一体型矛盾**が生まれる

お互いの価値を増す好循環の一体型矛盾、価値を減らす悪循環の一体型矛盾、どちらでもないものがある。(価値が増す,減るといふのは人間の基準による) **発散していくもの、収束していくもの**がある

仮説: お互いを高め合い価値を高め続ける何かは一体型矛盾

2.1 矛盾 (世界の中の矛盾)

矛盾は

1) 認識と行動の最小モデル

2) 客観世界の運動と人を含む生命世界の問題を扱える
どの領域においても、エネルギーが最小になるように運動は行われる。但し、**生命の領域においても、長い目で見れば、近似的にエネルギー最小になっている**(仮説:この粒度で、論理と歴史が一致している)が、生命は意志によってエネルギー最少を実現しない行動をとることがある。根源的網羅思考による行動は、意図的に高度な価値実現をエネルギー最少で行うことを目指す

共通に「機能と構造(内容と形式)の矛盾」

3) **人間世界の矛盾は、客観世界の矛盾 + α**

2.2 根源的網羅思考 (概要1) [FIT2012,16] [THPJ 2015/1, 2]

根源的網羅思考: 事実と価値のより大きな全体と本質の把握のため、オブジェクトの粒度と網羅の見直しを続ける

三概念	説明
オブジェクト	ある粒度で事実から知覚により切り取られ表現できる情報 =もの, 観念, その関係, それらの属性
粒度	空間的範囲、時間的範囲、属性
網羅	「抜け」の無いように全体を個々の要素で数え上げること

この三つからゼロベースで論理を構築する思考 (ただし本稿は既にある前提で述べているのでゼロベースになっていない)

事実も価値もオブジェクト

2.2 根源的網羅思考(概要2)

- 1) すべての人とコンピュータに有用
- 2) 論理を成立させる粒と粒の内容を決めるのが粒度
網羅がないと適切な粒度と論理を見逃す
- 3) 大きな価値が小さな価値に優先
- 4) オブジェクトと粒度と網羅は同時決定必要な両立矛盾
- 5) 論理的網羅が可能 → 厳密な帰納(仮説設定)
仮説設定、思考、議論の基礎

3. 根源的網羅思考 (粒度の説明と原理1)

今の事実自体の空間的複雑さ。今の事実自体の時間的複雑さ:
ある現象に関係しているのがどの現象なのか、自分が価値として
いるものが事実のどういう粒度と関係しているかがよく分からない。
事実も人の認識も日々変化している

→ 今の根源的網羅思考

粒度は人の生物的身体的制約、人の固定観念に規定される

→ 時に価値と真理と基本概念の今の粒度、機能、構造、網羅の
見直しを、根源的に随時行い続ける根源的網羅思考

3. 根源的網羅思考 (粒度の説明と原理2)

どういう粒度で切り取ったのかを明示的に表現しないでも世に通用する。粒度に相互規定され論理もあいまいになる

- 1. 議論や論文など相手を納得させる必要のある文では、網羅の中からどういう理由で粒度を特定したかを示した方が良い
2. 一連の思考、議論の論理の中で粒度は変えてはいけない
3. 矛盾を合成する場合、個々の矛盾の粒度を合わせたほうが良い

3. 根源的網羅思考 (粒度の説明と原理3)

(粒度の粒度)

1. 個々の粒度: 事実の粒度を網羅し、今の粒度の位置を知る
大きな粒度の価値が小さな粒度の価値に勝る
下位の価値の場合、全体の中の位置を明確に
2. 全体の粒度: 全ては関係し合い変化しているので、基本的には、何かを「良く」しようとするとなりを「良く」する必要がある

(応用)

1. 単純な利用: 同じか新しい粒度の網羅で新しい発明か発見
2. 粒度と網羅のサイクル決定で思考深化
3. 矛盾と根源的網羅思考のサイクル使用: 一体型矛盾

4. 生き方としての根源的網羅思考と矛盾

1) 手段1: 矛盾の構造の視点から

相互に相手を向上させる一体型矛盾をつくる 2)の内容を作る

2) 手段2: 全体を目指す根源的網羅の視点から

(21) 仮説設定への態度)

仮説設定(abduction)、思考、議論の基礎として根源的網羅思考と矛盾が、論理になるのが良い。正しい抽象には、論理的網羅による仮説設定が必要。論理的網羅(従って抽象)は、空間時間・属性の粒度に依存するので、当面今、必要な粒度を一つ一つコンピュータに教える必要がある。必要な粒度、網羅の選択は今でも人の課題。将来はこれもコンピュータに教える

課題: 特に1)2)のAI支援が必要

1) 今の「問題」に必要な認識、変更の粒度を特定する

2) 粒度変更(特に抽象化)を行い法則を発見する。

(AIだけで決めないで最終結論は人が出すのが良い)

4. 生き方としての根源的網羅思考と矛盾

2) 手段2: 全体を目指す根源的網羅の視点から

(22) 全体的態度)

今は、根源的網羅思考;オブジェクトから,事実と価値のより大きな全体と本質を把握するため,オブジェクトの粒度と網羅の根源的見直しが必要

1) 全ては関係し合い変化しているので、本来、何かを「良く」しようとすると全てを「良く」する必要がある。→ 本来、全世界の事実の粒度を網羅し全てを変更

2) あるオブジェクトの全ての属性・時間・空間粒度を具体的網羅可

→ 現実的に、任意の粒度の認識、変更から、世界の問題への私の認識、変更の位置と、世界の問題の全体に関わっている意識

3) 取り組んでいるのが下位の価値の場合、全体の中の位置を明確にし、上位の価値を優先 しかし、大きな価値に関する問題が分かりにくく、小さな価値の問題や例が分かり易いことがある。悪意があるとなりに関わらず、発信側のジャーナリズムや政党が、小さな価値についての感情的に分かり易い命題や例を語ることがある。それは大きな価値について何の証拠にもならないにも関わらず、多くの人々は批判された側の全否定に傾く。例:加計問題

4. 生き方としての根源的網羅思考と矛盾

(23) **歴史と論理から得られる世界観** (**論理**) [FIT2013, 16, 17]

弁証法の仮説によると、長い時間粒度で近似的に**歴史と論理は一致**する(仮説:この粒度で、論理の歴史的実現は、エネルギー最小で実現している)。ヘーゲルは物事は自らの持っている論理どおりに発展していくと考えた。この命題が成り立つ時間粒度がある

以下、論理と歴史の二面から考察

これから得られる**世界観**が態度を規定

4. 生き方としての根源的網羅思考と矛盾

(23) 歴史と論理から得られる世界観) (論理) [FIT2013, 16, 17]

態度(と行動)は論理的に対象化と一体化からなる

対象化: オブジェクトをオブジェクトとして操作する態度(と行動)

この意味の価値が、オブジェクトを変更する能力である「自由」

これは自分だけの価値

一体化: 私と他の生命,ものを含むオブジェクトを包み込み一体化する態度(と行動) **対象化の反対概念、対象の粒度を広げる**

この意味の価値が、私と他の生命,ものを含むオブジェクトを共に高める「愛」(「愛とは、私と他者が一体であるという意識」(ヘーゲル))

全オブジェクトの価値

仮説:『ある概念とその反対概念の統一(「一体型矛盾」)が真の発展をもたらす』という条件を満たす概念がある

4. 生き方としての根源的網羅思考と矛盾

(23) 歴史と論理から得られる世界観(歴史)

(人類の世界観と態度の歴史(概要1)) [FIT2013, 16, 17]

エネルギーと技術の意識的な利用がなかったら→生産量や人口
増えない、文化文明はなかった

エネルギーと技術の意識的な利用が、生産量や人口を増やしても
多様な生産物が生まれなかったら→ローカルで分散状態のまま、交
通、文化文明はなかった

エネルギーと技術の意識的な利用が、人口や多様な生産量を増や
し、他の多くの分野への展開をもたらすと→交通、文化文明、歴史、
世界観が生まれた。→人の、より意識的な努力と新しい形式がない
と解決できない段階が生じた

(多様な生産物が生まれず、人口だけ増えたらどうなったか?)

(人類の歴史(文化) (概要2))

価値実現のため、人類はたまたま二種の異なった時間
粒度手段を持った

進化 は、生命誕生以来、体内で、人の意志に無関係に働いている。 機能と構造の矛盾

文化 (技術, 制度, 科学, 芸術) は、4000年前から、体外で、人の意志で、働いてきた この文化は文明を含む

	操作	認識
対象化手段	技術	科学
一体化手段	制度	芸術

技術, 制度, 科学, 芸術の中も機能と構造の矛盾の矛盾で、かつ大きくは上のような機能の分類がある

(人類の歴史(概要3))

大雑把に世界歴史は次の四時代から成り立っていた

農業革命の時代(10000 年または 8000 年前 – 6000年前),

→ 物々交換が開いた経済制度の時代(6000年前 – 4000年前),

→ 資本主義成立まで、宗教制度と並立する独裁政治制度、文化文明成立後の時代(4000年前– 250年前)

→ 資本主義成立後、「自由、平等、博愛」が可能な間接民主制の政治制度の時代(250年前 – 今)

(人類の歴史(詳細1:農業革命、物々交換))

農業革命: 10000- 8000 年前

自然とエネルギー対象化による労働が、耕作地拡大、保存可能な農業生産物の量と人口を増大

物々交換 (6000年前 – 4000年前)

この「生産労働」が、4000年かかって、対象化の反対概念である一体化概念の原型を生む 言葉の利用、道具の利用、火の利用という対象化は一体化を生まなかった

6000年前のある時、集団リーダーの男と女が、たまたま集団の生産物を交換した。これが物々交換と所有概念の始まるきっかけ

所有は、一種のオブジェクトを自分に引き付ける一方向一体化の共同観念。これは所有していないものを大事にしない態度を生んだ

(人類の歴史(詳細2: 経済制度、文化))

物々交換は、制度の一種である経済を始める

また、物々交換は等価原理、等しさの原理をもたらした

これは徐々に等式、天秤や差の意識、推論を作り、科学に貢献する

増大する人の心をまとめ管理する必要のために 宗教が利用された。これは不完全な一体化を担うために役立った。支配されている組織への自分をオブジェクトに引き付ける一方向一体化である帰属意識という共同観念

法、政治と宗教 は4000年前に生まれた。これらは全て制度の一種である。文化、文明がこのころ生まれた。

法、政治、宗教が形成される。しかしこれらによる「帰属」は意識的に他者を排除する基礎にもなった。また等価原理と相まって、等価と扱ってはいけないものを等価と扱い「罪と罰」や復讐を生んでしまった。愛と自由の矛盾の原型はこのころ生まれた？

(人類の歴史(残った問題))

農業革命以来、10000- 8000年が過ぎて産業革命が起こり、その後 1) 人のためだけの対象化による行動がオブジェクトを大規模に変化させつつある。2) しかしこの行動は、必ずしも対象の価値を高めず、利益優先と、国などへの悪しき帰属意識が世界を覆っている

そのため我々の前には、戦争や環境破壊のような制度上技術上の多くの問題がある

農業革命以来、10000年- 8000年かかって、人類は、世界観と価値観を得た

その歴史と現在の総括結果は、

- 1) 対象化と一体化の意識的な統合の必要性、
- 2) 一方向一体化の不十分さ、個の確立の不十分さ

FIT2016で示した「各階層の矛盾への分解と、その中の矛盾が対象化と一体化の一体型矛盾での統一」は、エネルギー最小限理に規定され無意識的に実現された。また同時に、一体化と対象化の一体型矛盾が普遍的である実証にもなった

5. 結論と課題1 (態度)

根源的網羅思考: 複雑で変化するオブジェクトから, 根源的な事実と価値の全体と本質を把握するため, オブジェクトの粒度と網羅を意識し根源的見直しを続ける**全ての人の態度のパラダイムシフト必要**

1) 全ては関係し合い変化しているので、何かを「良く」しようとする**と本来は、全てを「良く」する必要がある。→本来は、全世界の事実の粒度を網羅し全てを変更**

2) あるオブジェクトの**全ての属性・時間・空間粒度を具体的網羅可**
→一瞬の生き方の理想は、自由と愛の統一、対象化と一体化の統一である。ここで、個が、全歴史全世界の中の自分の位置を知った上で一瞬に没入し、同時にこの一瞬に、客観的に全歴史、全世界の「問題解決」が進みつつあるという参加の主観における実感が得られる

(世界観)

個の確立、それぞれをより完全にしながら対象化と一体化の統一が新しい世界観。これが態度を規定

5. 結論と課題2 (論理:根源的網羅思考とAI)

仮説設定(abduction)、思考、議論の基礎として根源的網羅思考と矛盾が、知的生命の有効な論理になる

根源的網羅思考と矛盾の内容をAI用に定式化しAIの一部に。

特に次の課題

1) 重要な認識、特定の価値実現のための変更の粒度特定

2) 必要な粒度変更、特に抽象化を行い法則を発見すること:正しい抽象には、帰納でなく、論理的網羅による仮説設定が必要。論理的網羅は、空間時間・属性の粒度に依存するので、当面、今、必要な粒度を一つ一つコンピュータに教える必要がある。必要な粒度、網羅の意識的選択の定式化は、今でも人の課題。将来はこれもコンピュータに教える

謝辞

大阪学院大学名誉教授中川徹博士の十数年に渡るご支援に厚く御礼を申し上げます。